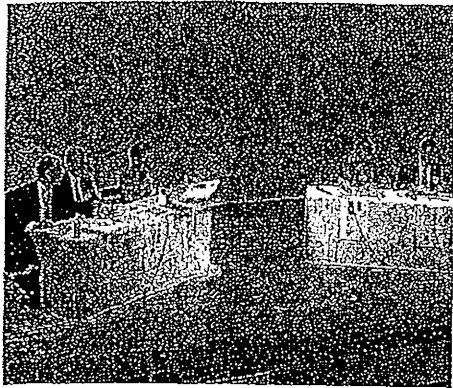


生涯学習

少子・高齢社会への貢献問う



活発な意見が交わされた

「少子・高齢社会の現状に対して、生涯学習は、いかに社会貢献しているか」との課題に取り組み、聖徳大学生涯学習研究所(福岡県所長)は、「第6回生涯学習フォーラム」(学術フロンティア推進事業の一環)を6月27日、千葉真松戸市の聖徳大学で開催した。

◇
■生涯学習の振興とまちづくり
午前の鼎談「生涯学習の観点から少子・高齢社会の活性化」に関する総合的研究の経過と展望」に続き、午後の分科会は、5つのテーマに分かれた。

全体会では、文部科学省生涯学習政策課地域づくり支援室の渡部徹・室長補佐が「生涯学習の振興とまちづくり」の講演を行い、「大学が地域貢献を展開する研究拠点(生涯学習社会貢献センター)

(他)コーレ家庭教育振興協会の永池崇吉会長は「子供は子どもの時に親に教わるべきである」という見直しが必要だ」と、親子関係の重要性を指摘した。

第6回聖徳大学生涯学習フォーラム

学術フロンティア推進事業研究大会

「幼年」という言葉は、中高年層の人たちが生涯現役で、地域のために力を発揮し、自らも創造的に生きてもらうこと、主権団体が連携したものである。

また、福岡県清見橋大の学塾の庄司政隆氏は「同窓について」をテーマにももつて、生涯学習がいつながるといふ視点から、市民の手によって出来たもので、教授公募制システムを導入している」と説明。

同窓のネットワークは「遊び心で大学」で、04年4月現在で、開講しているのは154講座、学生数は60000人におよび、学生間の相互交流が年々盛んになっているという。

NPO法人コシエニケーション・システム21の叶内啓子理事長は「心のユニバーサルデザイン」を目標とする市民の活動について「シニア層を家に閉じ込めないで社会参加を促している。世代を超えた『シニアセンター』を育んでいきたい」と述べた。

■市民が主役のまちづくりの現状と課題(第3分科会)
佛玄の政所利子代表取締役社長は、地域活性化の「1」について注目を集めている「コミュニティビジネス」について、「地域が必要とする仕事を、

主体が誰であれ展開することが大事だ。学生、主婦、リタイアした中高年など、あるいは官と民間が手を結んで取り組む場合もある」と説明。

また、地域フロンティアとして、まちを元気にした例として、「宇都宮餃子」や東京宇都宮の情熱誌「谷根千」(谷中、根津、千駄木の頭文字を取った誌名)などあげ、「それらのポテンシャルは、持続している」と、まちづくりの第一歩として、自分の目で気になるところからマップを作成する「マイマップ作り」を「キヤリアは積み重ねてはどうか」と提案した。

■生涯学習成果とキャリア開発(第4分科会)
佛キヤリアネットワークの河野真理子代表取締役社長は、厳しい経済不況の中で、雇用の流動化・多様化が拡大し、職場環境だけでなく個人の生き方、働き方の意識が大きく変化していると述べた。

「自分の『目録』(自己開示)をまとめることが重要。一人ひとりの個性が、企業の発展や日本の(特別分科会)

「聖徳大学の西村美恵子教授は、同大学生涯学習研究会同好会の活動、福岡県蒲原町に於ける若者の「キヤリア」は積み重ねていくもの。エンプロイアポーツ・ローンホルムの普及活動などの成果を報告。

また、社会を担う若者に対して、①子供たちから若者のまで一掃の仲間を学ぶ、教える、そして、②まちの文化を自治でも市民の力で参画する、③まちの文化を盛り上げる。準備から後片付けまで参加する、④学校を拠点として地域の関与する、⑤などの緊急アピールを宣言した。

聖徳大学生涯学習研究所学術フロンティア推進事業担当・齊藤ゆかり